ウミガメ

狐狸野類

海沿いの家の子どもらは、ずっと潮の音を聞いています。ぶくぶく泡立つ白波に、浸されていく浜の砂地。磯部から水が引いていくときの刹那に生まれる河のせせらぎ……。

貝殻遊びに網づくり、食べたりの寝たりの間にも音が止まないので、子どもらは潮の音をときどき忘れてしまうのでした。

さて、どんなにまっすぐな水平線の向こうにもまだ見ぬ陸があることを、忘れてはいけません。遠い南の海に小島がぽつんと一つありました。

その島の西の海べりに白い灯台が一本と木の小屋がちんまり立っていて、そこにはある女の子が母さんと二人で住んでいます。名前をシアと言って、不思議が大好きな女の子でした。

あるとき、母さんが夕食の準備に青い鱗の大きな魚を捌いていると、こんなことを言いました。

「母さん、魚は痛くないの？」

母さんはエプロンの裾をつまんでそう言われたので、そっと包丁を横へ置きました。

「わからないわ。私たちと同じとは、限らないものね」

シアはふーんと言って母さんが願う前から引っ込んでいきました。

母さんの方は何故そんなことを聞くのかと聞きそびれて、あの子が魚を食べないようになるんじゃないかということから色々と悪い想像を膨らませているのでした。

あくる日の夜です。ベッドで寝ていたシアは、なぜだかパッと目が覚めてしまいました。

外があんまりに明るいのです。窓から海のほうを見ると、まばゆい満月の光に照らされて、砂浜がきらきら輝いています。

「あのきらきらは、何だろう」

シアは、きっとたくさんの宝石が転がっているのだと思いました。こうなってはもう、眠れません。シアはお母さんに内緒で、海へ出かけることにしました。

砂浜に出ると、さっきよりいっそう月が大きく見えます。今にも海に落ちそうなのに、張り付けられたように動きません。さっぱりとした風の匂いや、砂たちをさらさらと撫でる波の音が、シアをうっとりとさせました。

「こんなきれいな海、見たことがない」

いつも見ている海なのに、今日は格別なのでした。

シアはそれから、窓から見えた宝石を探すことにしました。あれだけのきらきらです。そこら中に宝石が落ちていてもおかしくはありません。しかし、なかなか宝石は見つからないのでした。シアが不思議に思った、そのときです。

どこからか波の音にまじって、しくしく、しくしくと、誰かの泣き声が聞こえてきました。オカリナの、つやがかった音色のような声です。声のするほうへ向かうと、一匹のウミガメが、かわいた砂の上で腹ばいになっていました。ひすいのようにあざやかな、緑色をしたカメでした。

「こんばんは、すてきな声のウミガメさん。私、シアっていうの。良かったら、どうして泣いているのか聞かせてくれない？」

ウミガメはシアを見て驚きましたが、一度まぶたを閉じて涙を落とすと、答えました。

「こんばんは、かわいらしいお嬢さん。私はこの満月にさそわれて砂浜まで上がってきました。ですが、突然苦しくなって、動けなくなってしまったのです」

シアはそれを聞いて、心からかわいそうに思いました。

「どうしてか、わからないの？」

ウミガメは辛そうにうなずきます。シアはお医者さんではありませんが、体をみてあげることにしました。ウミガメの周りをぐるっと一周、すみからすみまで観察します。すると、あることに気が付きました。短い尻尾の下に、白くて丸いボールがころんと三つ落ちています。さらにもう一つ、尻尾から落ちてきました。

「あっ、これは卵よ。ウミガメさん、あなたは卵を産んでいるの。苦しいのはきっとそのせい。自分でもわからなかったの？」

ウミガメはポカンとして、何も知らないようでした。シアは前に、母さんから聞いたことを思い出しながら教えてあげました。

「卵はあの満月みたいな白いまんまるのことよ。この中にはあなたの子どもがいて、しばらくすると生まれてくるの。あなたもこのカラをやぶって生まれたはずよ。覚えてない？」

ウミガメはうるんだ目に、満月を映しました。そして、思い出したのです。自分が生まれたときのことを。涙がまた、ぽたりぽたりと落ちました。

「でも、どうして自分が子どもを産んでいるってわからなかったの？」

シアは気になって聞きます。ウミガメは少し考えて、次のように言いました。

「私が生まれたとき、周りには兄弟と姉妹がいるだけで、もうお母さんはどこにもいなかったのです。だから、自分が誰かから生まれたなんて、思ったこともありませんでした」

シアは何だか、恐ろしいような気持ちがしました。自分の親がいないなんて、考えられないことでしたから。シアはお家のほうを見つめながら、ウミガメが卵を産み終えるまで待ちました。結局、ウミガメは最後まで泣き止みませんでした。

「ウミガメさんは、お母さんに会いたい？」

ようやく動けるようになったウミガメは、我が子たちをながめていました。

「もちろんです。しかし、この子たちは……」

シアは言葉をさえぎります。

「会いに行けばいいよ。お母さんもあなたを探しているはずだから、この広い海の中でも絶対見つけられる。卵が心配なら、私に任せて。生まれたらあなたを探すよう言っておくわ。あなたもそれから、この子たちを探すのよ」

ウミガメはお礼を言って友達の握手をすると、何度もこちらを振り返りながら海に帰っていきました。

シアは髪に風を受けながら砂浜に立って、しばらく考え込んでいました。ウミガメさんは、卵の子たちをどう思っているだろう。ウミガメさんのお母さんは、ウミガメさんをどう思っているだろうと、思ったのです。

そのとき、「おーい」と声がしました。

声のするほうを見ると、お母さんが、遠くから手を振っています。

シアはなんだか鼻が痛くて、涙が出てきました。あふれる生暖かい涙を散らしながらかけていきました。かわいた砂に落ちるまで、涙のつぶは輝き続けました。